

「父」

桑口 恵美子

私が二十歳の時に、父がくも膜下出血で亡くなりました。成人式を終えて、4月からは社会人としてスタートする直前の、3月13日でした。

父が最後に見た花は、前日の母の誕生日であげたチューリップ、最後に食べた物は、姉が作った昼食の焼きそばでした。何気ない四人家族の日常は、父と私が炬燵でうたた寝をしていたのが最後でした。

4月からの通勤では、父と同じ時間の電車に乗る予定だったので、そんなに話すことがあるかなとか、痴漢の心配をしなくていいとか、一緒に通勤するのであればとアレコレ考えていた事が無用になりました。

父が居なくなってから、夢で父がよく出てくるようになりました。父は突然亡くなりましたが、何故か、夢の中の父は青白い顔色をしていて、私は『もうすぐ居なくなる父』と心構えをして向き合っている夢でした。三十歳で子供が生まれると、当たり前前に側にいるべき人が居なくなる不安から、夢の中でも子供の心配をするようになりました。心身ともに子供でいっぱいになると、青白い顔の父の夢は、パタリと見なくなりました。

子供も中学生になり、私も親として成長していかなげばと、側での見守りは父に託し、私は少し離れて構えていようと思います。